

出題分析		
試験時間 80分	配点 150点	大問数 3題
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]	
<p>【概評】</p> <p>昨年度に引き続き大問は3題であり、例年通り近世以降の出題であった。全体の設問数は昨年度とほぼ同じで、論述問題も昨年度と同じ10問であった。ただし、これまでも既に傾向が見られていた世界史との問題の融合が、歴史総合の導入とともにさらに進んだ。第1問のリード文のほかに、設問自体が同じものが論述問題(第3問)を含めてみられた。このうち人名や地名の選択問題は、日本史選択者には難しかったと思われる。</p> <p>純粋な日本史の設問では、論述問題などにやや難しいものも見られたものの、全体的には標準的なものが多く、昨年度と比べて大きな難易度変化はなかったと言える。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	万国博覧会の歴史	世界史の要素が多く含まれ、日本史選択者には対応しづらい設問がみられた。問1. イギリスの産業革命に関わる発明者は細かく、日本史選択者には難しい。問2②. 鎖国の過程に関しては昨年度も出題された。問4②. 薩摩藩が俵物をどのように入手したかは、教科書の注記に記述があるが、難。問6. β はグアム島、 γ はハワイ、 δ はサイパン島であるが、ハワイ以外の位置は日本史選択者には難しい。問7. aは「国民政府を相手とせざる……声明」、bは「井上蔵相」「緊縮内閣」、cは「日米通商条約の廃棄」「欧州戦争」などがキーワード。cは6か7だが、南部仏印進駐時にはアメリカによる石油禁輸などが行われ、史料の状況にはそぐわない。問8. a～cは、いずれも2022・2023年度入試のグラフ問題で出題された出来事。リード文の「大阪万博」から1970年を含むことがわかり、第1図から消費者物価指数の変化率が突出している年を狂乱物価の1974年、第2図からアメリカの貿易収支の推移が反転した時期を1985年のプラザ合意後と判断したい。	やや難

設問別講評			
II	高橋是清について	条約改正の論述問題を除いて、世界史の要素が少ない大問であった。問 10. c の同志社英学校の設立年がやや難。問 11. ややひねった問い方の論述問題。「土佐藩による提案」の内容と、「徳川慶喜のねらい」を書き分けるのが難しい。問 13. 教科書の注記にある、金本位制の自動調整作用に関する説明。問 14. 皇道派・統制派の理想とした国家像は細かい。問 15③. グラフは、消費税収の始まりが 1989 年であることに注目すればよい。	標準
III	慶應みらい君の探究型学習	世界史と内容が共通の論述問題 2 つからなる。全体として、グラフや史料の純粋な読み取りが重視されており、知識の要素は少なかった。問 16. 字数の制約からも、グラフに示された複数の指標の相関関係を述べればよい。問 17. 解答欄が 4 行と長い。ポイントは 1920 年代には輸入米ではなく移入米が増加したことである。関係する記述は日本史探究の教科書の注記にあるが、知っていた受験生は少ないと思われる。	標準

合格のための学習法

慶應義塾大学経済学部日本史については、論述問題は文章を手際よくまとめられるように、教科書を使って学習することが効果的である。年代配列問題の対策は、日頃から重要事項の整理として年表を使った丁寧な学習をしたい。出来事の流れと合わせて、できれば西暦年もある程度覚えておく方が直接的な対策になるだろう。史料は、史料集で代表的な題材を確認しつつ、要点を把握する訓練をしたい。また、グラフや地図は初見のものも出題されるが、教科書に掲載のものを中心に確認しておこう。特に地図は、日本史に関わる国外地域の位置をよく確認しておいた方がよいだろう。今年度から歴史総合分野が出題範囲に含まれるようになったことで、既に経済学部の特徴的であった「世界史の中の日本」という意識のもとでの出題が明確になっており、世界史との関連に注意して学習することが必要である。